

コミュニケーション能力指標 (can-do statements) をつかったプロジェクト型学習: 「総合的コミュニケーション能力」の獲得を目指して  
 Towards the Acquisition of a “Comprehensive Communicative Ability”: The Use of a Communicative Ability Index (Can-Do Statements) in Project-Based Learning

朴 智淑 コロンビア大学  
 Jisuk Park Columbia University

## 1. はじめに

他文化、他言語が共生する21世紀を生きるために、外国語学習者は何を目標とすべきだろうか。「外国語学習のめやす」(国際文化フォーラム、2012)は、21世紀における外国語学習の目標を「総合的コミュニケーション能力」の獲得とし、3領域(言語、文化、グローバル社会)における3つの能力(わかる力、できる力、つながる力)を伸ばすことにあるとしている。そしてそのためにさらに①学習者の関心・意欲・態度・学習スタイル、②既習内容や他教科の内容、③現実社会である教室外の人・モノ・情報をそれぞれ連繋させることが重要だとしている。また学習者が現実社会でどのようなコミュニケーション行動ができるようになったらいいかという考えに基づき、15の話題分野別にコミュニケーション行動を提案し、さらに4つの言語運用能力レベルを設け学習到達目標を具体的に指標化している。

本プロジェクトでは、上級の学習者を対象とし「3領域 X 3能力 + 3連繋」を指標にし、「地域社会と世界」という話題分野で言語運用能力指標のレベル4を目指したプロジェクト型活動を行った。学習者は関心のある社会問題を選び、その社会問題について他者にわかりやすく説明する作品(ビデオ、ブログ記事、新聞、ラジオ等)をペアで作り、それを外に発信した。そして問題について他者と議論し、問題の解決法を考え、最後にその問題解決のために社会の一員として自分にできることを考えて実行した。

本発表では、学生の作品の紹介と分析、意見交換の実際の例とプロジェクト後の学生からのフィードバックなどのデータを分析し、このプロジェクトが「総合的コミュニケーション能力」の獲得にどう貢献できるか考察する。

## 2. 外国語学習の最終目標とは

### 2-1. 学習者に求められている能力

外国語学習の最終的な目標とは何だろうか。まず、第一にコミュニケーション(=お互いの発話を理解する、意味交渉等)ができるようになることが挙げられるだろう。また、私が教えている大学には特に日本関係の専門の学生たちは研究のために日本語で書かれた文献が読めるようになるために日本語を勉強している学生も少なからずいる。では、学生たちは言語を単に「コミュニケーションのための道具」として、または「読みたい文献を理解するための道具」として、語彙や表現を覚えることで充分なのだろうか。これまで外国語教育では言語領域文化領域に焦点があてられてきたが、それだけでは言語は単なる道具としてだけ捉え

られ、語彙、文法を習得し、タスクが出来ればそれでいいという考え方になりがちである。

しかし、これからの社会、つまり多言語、多文化が共生する21世紀を生きて行く為にはそれだけでは足りない。「21世紀型のスキル」の重要性が叫ばれている。<sup>1</sup>

では、具体的に21世紀型スキルとはどんな能力なのだろうか。當作（2013）は上に述べたキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどを参考にし、以下5つの能力等を挙げている。

- A. 問題解決能力（高度思考力（情報活用力、客観的説明）
- B. 協働力
- C. コミュニケーション能力
- D. 異文化コミュニケーション能力
- E. 生涯学習能力、自律学習能力

## 2-2. 外国語教育・学習のガイドライン：「外国語学習のめやす」

では、次にこれらの21世紀型スキルを総合コミュニケーション能力の一部と考え、外国語教育・学習のガイドラインとして作られた「外国語学習のめやす」について紹介したい。（以下「めやす」とする）

「めやす」では、教育理念を「他者の発見」、「自己の発見」、「つながりの実現」だとしている。そして、教育目標を「言葉と文化、グローバル社会の学びを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀に生きる力を育てること」としている。そして、この教育目標を達成するために、学習目標を「総合的コミュニケーション能力の獲得」としている。

スリータイムズスリープラススリー  
表4：「3領域 X 3能力+3連繋」の概念図

|                      | わかる                | できる             | つながる               |
|----------------------|--------------------|-----------------|--------------------|
| 言語                   | A自他の言語がわかる         | B学習対象言語を運用できる   | C学習対象言語を使って他者とつながる |
| 文化                   | D自他の文化がわかる         | E多様な文化を運用できる    | F多様な文化的背景をもつ人とつながる |
| グローバル社会              | Gグローバル社会の特徴や課題がわかる | H21世紀型スキルを運用できる | Iグローバル社会とつながる      |
| +                    |                    |                 |                    |
| 関心・意欲・態度／学習スタイルとつながる |                    |                 |                    |
| 既習内容・経験／他教科の内容とつながる  |                    |                 |                    |
| 教室の外の人・モノ・情報とつながる    |                    |                 |                    |

総合的コミュニケーション能力」は言語、文化、グローバル社会の3つの領域から構成されている。この3つの領域で知識理解、技能、関係性構築を目標とす

<sup>1</sup> 「外国語学習のめやす」（国際文化フォーラム2012）では「世界が注目する21世紀型スキル」として Key Competencies, Partnership for 21<sup>st</sup> Century Skills, 21<sup>st</sup> Century Skills を挙げている。

る能力を目標としている。これをそれぞれ「わかる」、「できる」、「つながる」力と名付けている。この「3領域 X 3能力 = スリーバイスリー」を養うために、さらに①学習者の関心・意欲・態度・学習スタイルなどを考慮することが必要だとしている。また、②学習者がすでに学んだことのある他教科の内容とつなげることで学習内容が豊かになるとし、さらに「できる」、「つながる」力を養う為に③現実社会である教室外の人・モノ・情報を連繋させることが重要だとしている。

従来の言語教育を考えると、主に以下の表4の「言語」と「文化」領域の「わかる」と「できる」に主に焦点があてられてきたと言えるだろう。この

スリータイムズスリープラススリー  
「3領域 X 3能力 + 3連繋」では新しく「グローバル社会」領域における3つの能力、さらにつながる能力の獲得を目指している。

これまでの外国語教育で最も重視されてきたのは言語領域の「わかる」力、「できる力」であろう。言語領域の「わかる力」は、目標言語が理解できること、つまり文法、表現などだけでなく、音韻、音声等を含む言語の知識理解力を意味する。そして、言語領域の「できる力」とは、実際にその言語を使って実際の場面でコミュニケーション（非言語ストラテジー運用能力を含む）ができる力を指す。コミュニケーションは言語能力だけで成り立っているわけではない。コミュニケーション能力は言語領域と文化領域から構成している。文化領域の「わかる」力とは、自他の文化がわかる、また、自ら文化知識を求め、正しい文化知識を深めていく能力だ。そして、文化領域における「できる」力とは「多様な文化を運用できる」能力、つまり相手とのコミュニケーションを円滑に行うため、自他の文化の違いや共通性点を理解し、異文化間の調整ができることを意味する。これまでの外国語教育を考えると「言語領域」、「文化領域」の「わかる力」と「できる力」のみが主に重視されていたと言えるだろう。

しかし、先に述べた「21世紀型スキル」を養うためには、「言語領域」と「文化領域」の「わかる力」と「できる力」だけでは補えず、グローバル領域の3能力、さらに3領域における「つながる力」の育成が必要になってくる。

まず、グローバル社会領域の「わかる」力とは、社会の一員としての責任を自覚し、社会の重要な課題や問題を理解することだ。また、21世紀型スキルを身につける必要性を理解することも目標としている。

グローバル社会の「できる」能力は様々な文化的背景を持つグループの一員として、グループの目標を達成するために協力し自分の役割を果たすことができる「協働力」、そして、様々な情報を客観的に分析、解釈し、自らの考えを根拠に基づいて表すことができる「高度思考力」、また情報・メディア・テクノロジーを生かして、相互作用的に活用することができる「情報活用力」の3つのスキルを身につけることに焦点をあて構成されている。

言語領域の「つながる」能力とは積極的に他者と交流し、関係を作る力のことだ。その「つながり」は教室内だけでなく、教室外の学習者やその言語を話す人とのつながりを目指す。

文化領域の「つながる」力とは、異なる文化的背景を持つ人々と積極的に関わり、直接または間接的な交流を通し、尊重の念をもって相手の背景にある文化に向き合い、関係性を構築していく力である。つまり、学習者が交流の過程で他者から影響を受けて、自身の考え方を変えたり、新たな共有価値を創造したりすることで、様々な文化背景をもった他者と付き合っていく力を身につけることを目指す。

最後に、グローバル領域の「つながる」力とは自分が住んでいる身近な地域社会や国、広域地域社会（東アジア地域など）、グローバル社会が自分とつながっていることを実感し、それに関わる力のことだ。自分とつながりのあるグローバル社会のネットワークに関わり、ネットワーク全体の目標達成や、グローバル社会づくりのために、協力して行動することも期待される。

### 3. コミュニケーション能力指標

我々言語教師は教科書のどこからどこまで等、「何を教えるか」という考えでカリキュラムをたてがちであるが、「めやす」で紹介されているコミュニケーション指標は「何がどのくらいできるようになるか」という視点で作られている。本発表では、主にこの「コミュニケーション能力指標」に焦点を置き、このプロジェクトがどう「総合コミュニケーション能力」の獲得に貢献できたか見て行きたい。

#### 3-1 言語運用能力指標

以下の表5の「言語運用能力指標」は「どのくらいできるか」という指標である。本プロジェクトでは以下のレベルの4「想定外の状況でも、言語を創造的に使い、複雑な言語活動もできるレベル」を目標とし、3つのコミュニケーションモード<sup>2</sup>（対人モード、解釈モード、指示モード）をすべて取り入れるよう配慮した。

表5：言語運用能力指標レベル1-4

|  |
|--|
| レベル1：学習した基本的な語彙・表現を使って簡単な言語機能を果たせるレベル  |
| レベル2：学習した語彙表現、文法を使って、想定内の言語活動を行えるレベル   |
| レベル3：想定外の状況でも、助けを借りて言語活動が行えるレベル        |
| レベル4：想定外の状況でも、言語を創造的に使い、複雑な言語活動もできるレベル |

#### 3-2 内容指標

上に述べた言語運用能力指標がどのくらいできるかを提示しているのに対して、以下に述べる内容指標は何ができるかを提示した指標である。コミュニケーション能力指標は表5の言語運用能力指標と表6の内容指標を合わせて使用される。

<sup>2</sup> 「外国語学習のめやす」では3つのコミュニケーションモードとして「対人モード（やりとり）」、「解釈モード（理解）」、「指示モード（表現）」を提示している。このコミュニケーション・モードの考え方は以下の文献を参照している。National Standards in Foreign Language Education Project [eds.]: Standards for Foreign Language Learning in the 21<sup>st</sup> Century, National Standards Collaborative Project, 1999.

表7：内容指標15の話題分野と内容

•自分と身近な人々 •学校生活 •日常生活 •食 •衣とファッション •住まい  
 •からだと健康 •趣味と遊び •買い物 •交通と旅行 •人とのつきあい •行事  
 •地域社会と世界 •自然環境 •ことば

本プロジェクトはこの15の話題分野の中の「地域社会と世界」というトピックで行われた。上に述べた言語運用指標のレベル4と合わせた具体的な内容は以下の通りである。(表8)

表8：地域社会と世界 レベル：4

- 4-a. 日本と相手の国における地域社会について書かれた文章を読んで、その共通点・相違点などについて、話し合うことができる。
- 4-b. 国際問題についてのテレビのニュースや新聞報道の内容を理解できる。
- 4-c. 現代社会の課題について書かれた文章を読んで、自分の意見を含めて、口頭または文章で意見を交換できる。
- 4-d. 日本と相手の国の関係について調べ、自分なりの意見をレポートにまとめることができる。
- 4-e. 国際社会で生きて行くために何が必要かについて、意見交換ができる。

#### 4. プロジェクト型学習

「めやす」では、教室内に現実社会の文脈を与えて、教室外の人、もの、情報とつながり、社会的目的を果たすことができる「プロジェクト型学習」を紹介している。また、佐藤、熊谷(2011)は「学習とは学習者を取りまく環境や他者との相互交流を通して起こる、社会文化的な活動」と考え、様々なプロジェクト型の学習活動を試みている。本プロジェクトでは、このうちの「社会と関わろう・プロジェクト」を参考にし、この「3領域 X 3能力 + 3連繋」を指標にしたプロジェクト型活動を行った。

某アメリカ私立大学の上級日本語クラス、4<sup>th</sup> Year Japanese II( ACTFL 中級の中～上級の上) 2セッション全てで春学期(全15週間)に行われ、2011年の春学期から2013年の春学期まで計45人が参加した。学生は2～3人ぐらいのグループに分かれてプロジェクトに参加した。授業は1クラス70分で、1週間に3回、また、成績全体の10パーセントがこのプロジェクトの成績としてあてられた。

以下が活動概要である。(表9) 学生が選んだトピックの例としては「歴史教科書問題」「いじめ」「少子化問題」「差別問題」「領土問題」「肥満増加の問題」「テレビゲームと暴力性の関係」等があった。第6週に学習者は選んだトピックについて調査研究をする過程で重要な語彙や表現のリストを作り、個別に準備された小テストを受けた。ここでは、外国語学習が他教科の内容、又は既に学習者が知っている内容などと連繋させることで、学習の内容を補強し、それをさらに深めることにつながるよう配慮した。11-12週に練習後フィードバックをもとに作品を完成させクラスで発表後、オンライン等で作品を公開した。全体の活動を通してブログや「ラング8」というオンラインツールを使い、教室の外の人

と意見交換をし、また最後のクラス発表の場や作品公開後もオンライン上等で意見の交換等を通して、つながることが出来るよう配慮した。他にも「つながる場」として、発表会、日本の学生との交流会を設けたり、大学で定期的に行われているNY在住の日本語を母語とする人たちとの交流会でも、学生たちはプロジェクトのトピックについて意見交換を行った。

表9：

|      |  |
|------|--|
| 活動概要 | <p>第 1週:プロジェクトの目的、手順等について説明</p> <p>第 2週:テーマを決める、企画書①提出(TA、クラスメートからフィードバックをもらう)</p> <p>第 4-5週:企画書②提出(クラスメート、TA、講師からフィードバックをもらう)</p> <p>第 5週:選んだ社会問題に関する語彙リストを作る</p> <p>第 6週:リストを覚え、小テストを受ける<br/>プロジェクト評価基準を決める/ドラフト1書き始め</p> <p>第 8週:ドラフト1提出</p> <p>第 9週:講師、TA、クラスメートにフィードバックをもらう</p> <p>第 10週:フィードバックをもとにドラフト2提出</p> <p>第 11週:練習/フィードバックをもとに作品を完成させ公開する</p> <p>第12週:作品鑑賞&amp;コメント(実際に自分ができることを行動する)</p> <p>第14週:作成した評価基準をもとに自己、他者の評価<br/>プロジェクトアンケート</p> |
|------|--|

#### 4. 学生の最終作品：

まず学生は企画書に自分たちのプロジェクトにどんな現代社会の課題・問題を選び、どうしてその社会問題をトピックに選んだか、またどんな人たちに対して何が一番伝えたいのかなどを詳しく書いた。また、上に述べたコミュニケーション指標「地域社会と世界」というトピックのレベル4-b.「国際問題についてのテレビのニュースや新聞報道の内容を理解できる。」という目標を達成する為に、第一原稿から、どんなリソースを使ったか、参考文献を必ず入れるよう指示した。以下はその企画書①に対する他の学生からのコメントとそれに対する返事である。

1 おもしろいプロジェクトになりそうですね。この問題を解決する方法をもっと詳しく聞きたくなりました。Sさんは LGBT関連のサークルに所属していますね。その外にも 大学 で今も行われている運動はありますか。そして、問題を解決するために意識したほうがいいとありますが、「この人たちは私と違う」と意識しすぎるからこそ問題がある、という説もあるでしょう。どう思いますか。

012-02-17 04:18)

学生からのコメント兼質問で「問題を解決するために意識したほうがいいとありますが、「この人たちは私と違う」と意識しすぎるからこそ問題があるという説もあるでしょう。どう思いますか。」という問いに対して、学生は以下のように答えている。

5 コメントありがとうございます。私たちは、本当の平等は、他の人たちが私たちとどう違うかまず理解して、その違いを認めて、尊重することだと思うので、読者にLGBTの問題を認識させることに集中するつもりです。でも、ミス さんがおっしゃったように、解決の方法について話すとき、: 大学 アではその問題のためにどんな努力をしているかについてもっと詳しく書くことにしました。

-(2012-02-29 16:59)

コメントで「私たちは、本当の平等は、他の人たちが私たちとどう違うかまず理解して、その違いを認めて、尊重することだと思うので、読者に LGBT の問題を認識させることに集中するつもりです。」と学生からの問いに対して答えている。このコメントから 4-e の「国際社会で生きて行くために何が必要かについて、意見交換」が出来ていると言えるだろう。このように学習者はコメントをもとに作品をよりよいものにするために、他者と意見を交わしたり、取り入れたりした。つまり、学習者は実際の交流を通して、教室の外の人とつながりながら、目標言語を使って意見調整をし、学習を進めていったことが分かる。次に、以下は同じ企画書①に関する学生と TA との意見交換の例である。

③ とてもおもしろい内容ですね。しかし、ちょっと幅が広いように感じます。どこかに焦点をあてて、より深い内容にしてみたらもっといいと思います。例えば、今行われている解決策に焦点をあてたり、あるいは、問題そのものに焦点をあてたり。頑張ってください！

2012-02-20 10:01

とあるように、最初に学生が書いた企画書ではトピックの幅が広すぎるので、どこかに焦点をあててもう少し深い内容にできるようにしてはどうかという TA からのコメントに対して、学生は以下のように答えている。

さんへ

コメントありがとうございます。焦点を決めて、深く説明した方がいいですね。なので、私たちは差別的な法律や差別を防ぐための法律を調べることになりました。そして、その法律的な問題を解決するの運動について書くつもりです。

コメントから分かるように、TA からのコメントを受け入れて、「差別的な法律や差別を防ぐための法律」に焦点をあててアメリカと日本とを比較し、問題解決策を探るという内容に変えた。

この作品を通して、学生 H と S が LGBT の権利に関するアメリカでの問題点として指摘している点は次の通りある。(学生の最終原稿より抜粋)

アメリカの問題点：

1. 半分以上の州が LGBT の人たちに対する職場での差別を禁止する法律が通過していないため、差別を受けても、彼らの人権を守れない。
2. 今のアメリカでは、多くの LGBT の人々は合法的に結婚することもできない。
3. 1996年、国会は結婚を男と女の間でしか成立しないと定義した Defense of Marriage Act (DOMA) という法律を通過した。
4. 2011年に、オバマ政府が DOMA が憲法を犯すと判断したにも関わらず、国会は DOMA を支持し続けることを発表した。
5. LGBT のカップルは、養子縁組することも大変難しい。

また、日本の問題点を次のようにまとめている。

日本の問題点：

1. 日本ではまだこの問題についての意識のレベルが低いのが実情。
2. 日本では同性愛者が職場や学校で差別を受けても、法律的に保護してもらうことはできない。



3. 政府が提供する公営住宅に同性愛者の人が住むのは違法である。
4. 同性愛者の人が同居している恋人に家庭内暴力を受けたときにも、法律の保護は受けられない。
5. 職場で差別を禁止する法律も、同性愛者の人に関する政策は含まれていない。
6. どの政治政党も LGBT の問題について正式な政策を表明していない。

ここから見られるのは、学習者は 4-a. 「日本と相手の国における地域社会について書かれた文章を読んで、その共通点・相違点などについて、話し合うことができる。」と指標の 4-b. 「国際問題についてのテレビのニュースや新聞報道の内容を理解」できていると言えるだろう。

彼らがアメリカと日本の LGBT の現状を色々なソースを使って調べ、その現状を理解し、自分たちの分析結果をまとめているということだ。つまり、グローバル社会領域の「わかる」と「できる」能力を使っていることが分かる。

また、この学生たちはプロジェクトの中で、解決に向けて非政府組織の活動や努力を紹介し、そのサポートやボランティアの可能性を示した後、個人の努力で実際にできること、していることなどを以下のように紹介している。

非政府組織の活動／努力：

1. LGBT の人のために色々な法律に関する活動をしている「Human Rights Campaign」という協会
2. 電話相談サービスをはじめとして、LGBT の路上生活者のためのシェルター、LGBT の人や LGBT の人の家族のための支持を行っている「The Trevor Project」

個人の活動／努力：

1. いじめやハラスメントを目にしたら、絶対に黙ってはいけけない。（日常的なサポートこそが一番大事なことだ。）
2. 私たちの大学にも、色々な LGBT に関する学生グループがあり、例えば「Everyone Allied Against Homophobia」（同性愛嫌悪反対同盟）はキャンパスで LGBT のための安全な場所を作るように努力している。
3. 寮にはれるポスターを作って、配布（自分の部屋／寮は LGBT の人たちの安心できる場所であることを示すポスター）
4. 毎年力になりたいと思っている高校生のための集会を行い、集会では、皆が自分でできることを話したり、他の LGBT の問題に関心がある学生と会って話し合ったりすることができるようにしている。

ここから、学習者は指標の 4-e. 「国際社会で生きて行くために何が必要かについて、意見交換ができる。」が達成できたとと言えるだろう。また、グローバル社会領域の「できる」力の特に高度思考力、情報活用力と社会の一員としての自覚を持ち社会と繋がりとうする姿勢が見られるという点で、グローバル社会領域の「つながる」力を使っていることがうかがえる。

## 5. アンケート

プロジェクト後、アンケートを行なったが、ここではプロジェクトでの経験が学習者の内面にどのような影響を与えたかという視点から考察する。



## コメント1-3:

1. 「しかし、日本語でこの問題について研究したり、書いたりすると、何年間前に全然知らなかった日本語でこのような複雑なテーマについて詳しく書けることを理解すると、自信になりました。先生、いいプロジェクトを作ってくれてありがとうございます！」
2. 「このプロジェクトのため日本語で書いた書類をたくさん読んでできましたので、日本語でものを調べる自信が増えました。そして、社会問題に対してもっと深く考えることができました。」
3. 「このプロジェクトから、私は日本語で私にとって面白いことについて話すのは思ったよりやさしいということを知りました。」

「めやす」でも、「自分の関心や興味、ニーズに基づいて題材、学習内容を決めることが許されていれば、学習の動機付けは高まり、現実社会の複雑さを反映した方が、単純な活動より学習効果がある」としているが、コメントを分析すると、上のコメント1-3は学習者が言語レベル的にハードルが高くて手が出せなかったような社会問題でも、自分の関心のあるトピックを選ぶことによって、モチベーションが上がり、複雑な社会問題のようなテーマも扱うことは可能だと気付き自信につながっていることが伺えるコメントである。

## コメント4-6:

4. 「. . . Lang8 で出すことで、自然な日本語をもう少し理解するようになったと思います。」
5. 「日本語で社会問題について意見を言うのはたいてい難しいですが、そのために頑張ると、日本語が上手になります。私はこのプロジェクトを研究していた時に、見つけた科学的な結果は思いがけないからびっくりしました。」
6. 「肥満についてたくさん習いました。このプロジェクトの一番役に立った部分は問題についての単語を習うことだと思います。日本人と肥満について会話ができて来たのは私の目的でした。そして、他の人の選んだ問題についてならうことも楽しかったです。」

上のコメント4-6は、できなかったことが出来るようになったと感じていることがうかがえるコメントだ。5のコメントは、このプロジェクトを通して社会問題についての意見を伝えることの難しさ、コミュニケーションを図ることの難しさを学び、さらに努力しなくてはいけないという気持ちを持つようになった。つまり、学習へのモチベーションが上がったと判断できるコメントだと言えるだろう。

## コメント7:

7. 「良かった点は相手の能力と自分の能力は異なっていた。自分ができないことをやってもらいながら、できる事を相手を助けてあげられるようにしました。」

最後のコメント7では、「相手の能力と自分の能力は異なっていた。自分ができないことをやってもらいながら、できる事を（して）相手を助けてあげられるようにしました。」とあるように、学習者はグループワークを通して、目標を達成する為に助け合いながら協働力を発揮していたことがわかる。

## 6. まとめと結論

外国語の授業では何を教えるかという考えに基づきカリキュラムをたてることが多いが、本発表では、何ができるようになるかという考えに基づき、コミュニケーション行動を具体的に提案した「コミュニケーション能力指標」を指標にし、21世紀の外国語教育の目標「総合的コミュニケーション能力」の獲得を目指したプロジェクトについて、実践報告を行なった。

学習者の企画書、原稿、クラス発表、ブログ上での他者とのやり取り、アンケートを考察し、このプロジェクト学習者の「総合的コミュニケーション能力」を養うことに、どのように貢献できたか以下の点にまとめる。

1. 自分が現在住んでいる国、地域と日本やその他の国における地域社会について書かれた文章等を読んで、様々な情報を整理し、その共通点・相違点などについて、自分の意見をまとめたり、発表したり、話し合ったりすることができた。
2. 国際社会で起こっている社会問題について何が必要かについて、意見交換、意見表明ができた。
3. 他教科と連携することで、学習内容を深め日本語学習効果を高めることができた。
4. 現実社会の文脈の中で、教室外の人、もの、情報(言語領域、文化領域、グローバル領域において)とつながる機会が持てた。
5. 日本語を勉強する「楽しさ」が増した。

最後に、今回のプロジェクトでは、教室の外で他者と対話をしながら、つながる機会があったものの、レコーディング等ではなかったため、学習者とどんなダイアログがおこったか調べるができなかった。今後の研究で、ダイアログの内容も詳しく調べる必要があるだろう。

## 謝辞

本プロジェクトの活動において、さまざまな方にご協力いただきました。学生の発表に来てくださった皆様、ご協力いただいたTA、先生方ありがとうございました。また、一緒にプロジェクトを行ったナズキアン先生、松井先生、ありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。

## 参考文献

国際文化フォーラム2012「外国語学習のめやす2012 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」

佐藤慎司、熊谷由理(2011)「社会参加をめざす日本語教育—社会に関わる、つながる、働きかける」、ひつじ書房

當作靖彦(2011)「国際文化フォーラム通信」no.89 特集関連資料「21世紀の社会に対応するパラダイムシフトを」

當作靖彦(2013)「NIPPON3.0の処方箋」